

2021年9月16日(木)

「ピンクリボン活動の18年」

2021年日本民間放送連盟賞特別表彰部門「放送と公共性」優秀賞受賞

今年の2021年日本民間放送連盟賞で、HTBがエントリーした「ピンクリボン活動の18年 おっぱい2つとってみた その前と後」が特別表彰部門「放送と公共性」*優秀賞を受賞しました。

「放送と公共性」は、2006年に特別表彰部門に新設されたもので、放送の公共性を強く意識しながら民放各社で取り組んでいる企画や開発の事績に対して贈られます。今回、優秀賞を受賞した取り組みは、HTBが応援し活動を行っている乳がん早期検診の啓発活動「ピンクリボン運動」について18年に及ぶ記録をまとめたものです。

2003年、一人の女性患者との出会いから始まった活動は、乳がん検診の啓発やピンクリボン運動の支援にとどまらず、現在はがんを取り巻くジェンダー平等や生きづらさをなくしたいというがん教育にも力を入れています。活動の先頭に立ってきたディレクター自身、2019年に乳がんを罹患しましたが、乳がん患者の現実を伝えようと自らにカメラを向け、HTBノンフィクション「おっぱい2つとってみた～46歳両側乳がん～」**を制作・放送。その後も、HTBの自社WEBメディア、SODANE(そだね)やSNS、YouTubeでの発信。また、患者同士の取り組みをつなげる役割を果たすなど、活動は今も広がり続けています。

講評では、「自ら乳がんを罹患したディレクターが、当事者としての問題意識を、冷静な取材者の視点で取り上げており非常に感銘を受ける。他の罹患者とも手を携えて病を乗り越えようとする取り組みは、この活動が公共性を帯びていくプロセスにもなっている」と高い評価を受けました。

長期間にわたってピンクリボン活動を担ってきた、乳がん患者当事者でもある阿久津友紀ディレクター(現コンテンツビジネス局ライツビジネス部長兼デジタル編集長)は、今回の優秀賞受賞について、「18年前、『がん患者が生きづらい社会』、そう一人の患者さんに言われ、衝撃を受けました。自分自身が患者になったとき、より深くその意味が理解できました。『病になるのが許されない社会』も終わりにしたい。がんに限らずこれから一人でも多くの人が生きやすい世の中になるように活動を続けたいと思います」とコメントしています。

*日本民間放送連盟賞特別表彰部門「放送と公共性」

HTBの同賞受賞は、最優秀賞を受賞した「市民たちを動かした『政務調査費報道』(2008年)、優秀賞を受賞した「詐欺撲滅キャンペーン『今そこにある詐欺』(2014年)、「シリーズ『老いるショック』(2016年)に次いで4回目。

**HTBノンフィクション「おっぱい2つとってみた～46歳両側乳がん～」(2020年5月9日放送)

2020年日本民間放送連盟賞 番組部門テレビ報道番組優秀賞受賞

第58回(2020年度)ギャラクシー賞 報道活動部門選奨受賞

ドイツ・ワールドメディアフェスティバル ドキュメンタリー部門銀賞受賞

JAPAN PRIZE 2020 グランプリ日本賞 ファイナリスト

ニューヨーク・フェスティバル 2021 ドキュメンタリー・社会問題部門ファイナリスト

HTBテレメンタリー「おっぱい2つとってみた～46歳両側乳がん～」(2020年4月4日放送)

テレメンタリー2020年度最優秀賞受賞